

2 . 流域の自然状況

2 - 1 地 形

留萌川流域の地形は、東西に約 21km、南北に約 23kmの三角形状を呈し、留萌川は、ほぼその中央を貫流している。

地形地域区分では、留萌川を挟んで増毛山地とポロシリ山地に分けられ、また海岸地域は阿分台地、三泊台地に区分され、平坦地は少ない。留萌川の河口付近には、三角州性低地が分布し、これより上流には各河川沿いに細長く扇状地性低地が分布している。本川沿いは、上流から下流まで、この扇状地性低地が幅約 500mで続き、広い沖積平野の形成はない。また、海岸線に平行して上下 2 段の砂礫台地が見られ、これより内陸側は、大起伏丘陵地及び小起伏山地が広く分布している。

2 - 2 地 質

留萌川流域の地質は、主として山地を形成する新第三紀層と、河川や海岸低地に発達する第四紀の未固結堆積物で構成されている。

基盤の新第三紀層の地質構成は、中新世の砂岩、泥岩、礫岩、頁岩と、その上位の鮮新世の砂岩、凝灰岩、および一部に点在する玄武岩溶岩、火砕岩類と岩脈よりなる。

留萌川左右岸の山地～丘陵地は、中新世の硬質な礫岩、頁岩が尾根筋を形成し、軟質な砂岩、泥岩が緩やかな丘陵地帯を形成している。この丘陵地帯に支流が流れ、留萌川本流は鮮新世の軟質な砂岩、凝灰岩分布域を流下する。

これらの地層は大局的には北西 - 南東方向を軸とする褶曲構造をなしており、留萌川の中流～下流域の流向を支配している。

基盤の新第三紀層を覆う新第四紀層は、主として現河川によってもたらされた氾濫原堆積物であり、未固結の砂～粘土よりなる。河口から約 8 km上流の大和田地域に、固い基盤岩の露出による地形の狭隘部があり、氾濫原堆積物は、ここを境に上流側は幅約 500m、下流側は幅約 1,000mで分布する。

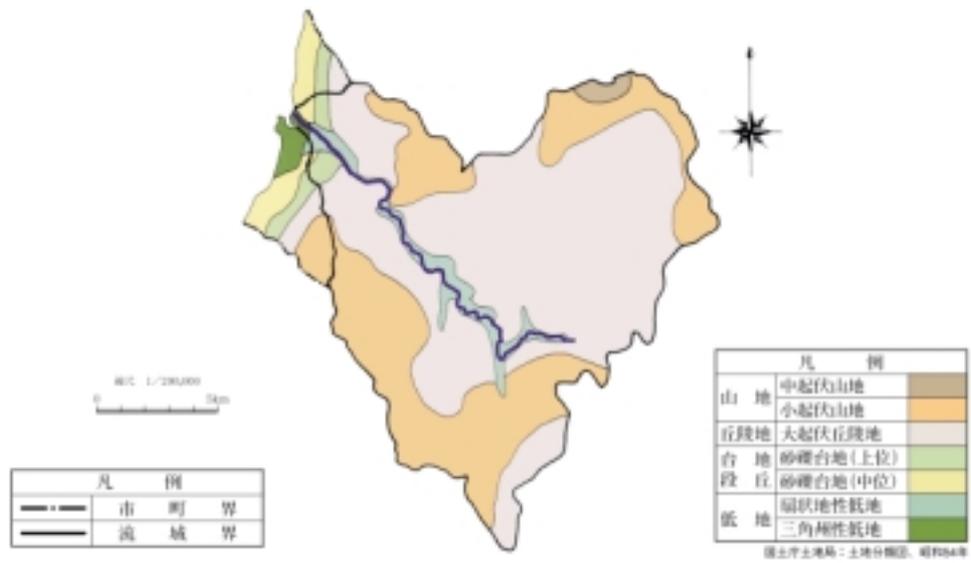


図 - 3 留萌川流域地形分類図

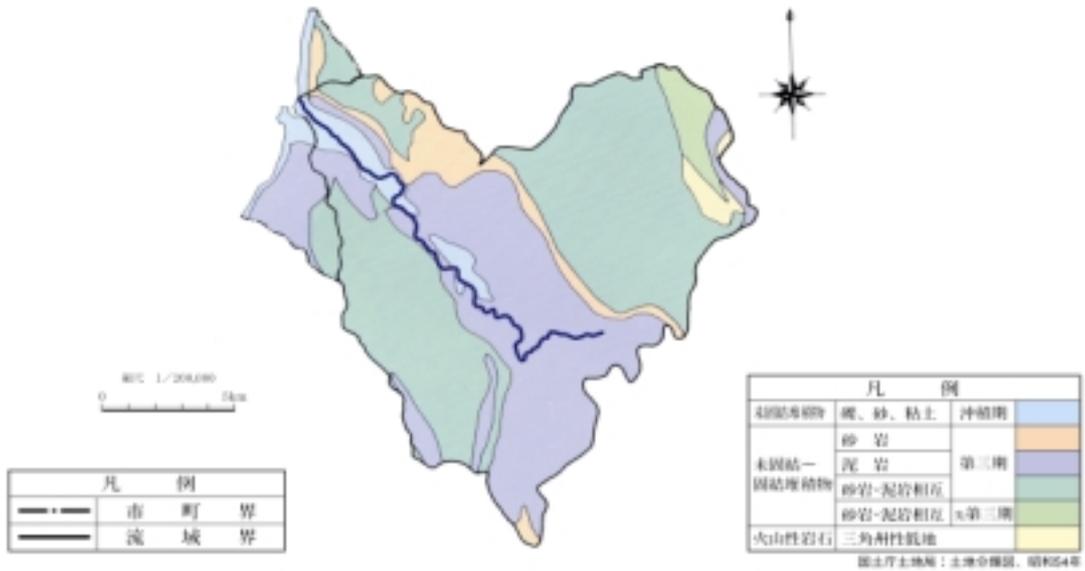


図 - 4 留萌川流域表層地質図

2 - 3 気 候

留萌川流域の気候は、冬期においてはアジア大陸からの寒冷な気団が北西季節風として運ばれ、夏期には北太平洋の温暖な気団が南東季節風として流入し暑さをもたらすが、盛夏期は短期間である。

本流域の年平均気温は、8 程度であり、最暖期の7月～8月の月平均気温は20 程度、最寒期の1月～2月は - 5 程度である。

また、流域の年平均降水量は、1,500mm程度であり、出水は、8月～10月頃の台風によるもの及び前線性によるものが多い。

年平均風速は、5 m/sec 程度で、夏は比較的弱いが、初冬から強くなり11月～1月にかけて6～7 m/sec と年間を通して最大となる。

表 - 2 近年の年降水量（大和田観測所）

年	降水量 mm
昭和62	1,675.8
昭和63	1,684.5
平成元年	1,520.0
2	1,483.8
3	1,541.8
4	1,624.1
5	1,200.0
6	1,225.5
7	1,048.5
8	1,092.0
平均	1,409.6